

会議録(概要版)

|            |   |
|------------|---|
| 審議会等の名称    | 第7回山口市スマートシティ推進協議会  |
| 開催日時       | 令和3年10月15日(金曜日)14:00~16:00  |
| 開催場所       | 防長苑 2階 孔雀の間   |
| 公開・部分公開の区分 | 公開  |
| 出席者        | 松野浩嗣委員、杉井学委員、中川健一委員、濱田泰委員、大田正之委員、永久弘之委員、会田大也委員、田中光敏委員、中島和彦委員、鈴木文彦委員、兒玉達哉委員、高田新一郎委員、藤井智佳子委員、田中貴光オブザーバー   |
| 欠席者        | 山本庸子委員  |
| 事務局        | 山口市総合政策部スマートシティ推進室  |
| 次 第        | <p>1 開会</p> <p>2 会長挨拶</p> <p>3 議事</p> <p>(1)山口市スマートシティ推進ビジョン(兼)官民データ活用推進計画の策定について</p> <p>(2)意見交換</p> <p>4 次回の日程</p> <p>5 閉会</p>   |
| 議 事        | <p>1 開会</p> <p>2 会長挨拶</p> <p>(会長挨拶)</p> <p>3 議事</p> <p>(1)山口市スマートシティ推進ビジョン(兼)官民データ活用推進計画の策定について<br/>(資料1「山口市スマートシティ推進ビジョン(兼)官民データ活用推進計画(素案)について」について説明。)</p> <p>(資料2「山口市スマートシティ推進ビジョン(兼)官民データ活用推進計画(素案)【概要版】」について説明。)</p> <p>(資料3「山口市スマートシティ推進ビジョン(兼)官民データ活用推進計画(素案)」について説明。)</p> <p>(2)意見交換</p> <p><b>【松野会長】</b></p> <p>どうもありがとうございました。それでは引き続き、議事(2)番目の意見交換に入らせていただきたいと思います。今の、説明に対する疑問などをお願いします。せっかく</p> |

お集まりですので、各委員から一人ずつご意見をいただきたいと思います。名簿順で進めさせていただきたいと思います。ではまず、杉井委員からお願いします。

【杉井委員】

山口大学の杉井です。半分、私事になるかもしれませんが、私、この資料の中にもありましたように、現在阿東徳佐地域で調査をさせていただいておまして、そこで感じたことは、非常に山口の市街地に近いのですが、車で、一番阿東徳佐地域の遠いところまで行っても1時間くらいなのですが、まったく環境が違う。様々なインフラを含めてなのですが、調査をして直面したのは、公共交通機関がほとんどない。タクシーに乗ろうと思ったら、タクシー業者がもう廃業していてタクシーもない。さあ、どうやって帰るというような話になりまして、そういうところから、この資料の最後のところにあって、これはとてもいいなと思ったことです。以前からこの資料は出ていたのですが、68ページのところ山口モデルスーパーシティ構築プロジェクト、この中に地域として、阿東徳佐の地福地域それから阿東地域が入っているというところで、人口が集中している市街地だけではなくて、少し人口密度の低いところも忘れてはならないということを最近私は実感しています。特にいろいろな課題があると思うのですね。高齢者が多いというようなこともあって、じゃあどういうふうにして、DXであるとかスーパーシティを進めていくのか、課題はたくさんあると思うのですが、ぜひここも忘れないように。中山間地域、山口市、県もそうですが、中山間地域を含めた形で、スマートシティが発展していけばいいなというふうに感じています。

【松野会長】

では、次に中川委員お願いします。

【中川委員】

NTT 西日本の中川と申します。よろしく申し上げます。ご説明受けまして、ちょっと気になったところ、確認しておきたいところを含めて、発言させていただきたいと思います。まず、9ページの実施体制ですが、今、プランニングとかお手伝いするところがスマートシティ協議会で、市民企業等にリンクするところが自治体として山口市であるとか、民間事業者様とか大学様とかという形なのですが、結構足の長いプロジェクトで、進めていくにあたっては、第三セクターというか独自の立場でやっていくというのが、結構ほかの自治体とかトレンド的になってきていたりするので、短期的に終わるものでないですし、それぞれ自治体の強みとか事業者さんの強みとかを生かすために、独立的に第三セクターみたいな形でやるというのが検討出来たらいいのかなと思っておりますが、今の時点でこういう形で進めております。将来的にはそういった体制も含めて検討が必要ではないかなというのが1つ目のコメントです。

2つ目が11ページのところで、会田さんと藤井さんがいろいろご検討いただいた件をちょっと見させていただいたのですが、最終着地のところが何種類もアプリを作る

のではなくて、既存アプリを様々な分野に横展開するという考え方ですが、この辺はアプリ開発という観点では濱田さんがお強いかもしれないのですが、一つの特定のアプリケーションを、機能をどんどん拡充するという形になると、ベンダーロックオンされて、高止まりしたり、融通が利かなくなってしまうと、もうどうにもならない、ということになりかねない、といいながら各分野で強いアプリケーションがあるのですね。保育系だとコドモンとか、いろいろな強みがあるアプリケーションというのがあるので、そういったアプリケーションを横でつなぐ、都市 OS みたいなところが14ページの右下のところに図があるのですが、そういったものを、データを有効活用したり、UI がバラバラになるのであれば、一つのビューで見せるようにする仕組みとかは技術的には可能なので、既存のアプリを広げていくという考え方については、一つのアプローチとしてはあるのですが、そういったところも含めて考えた方が、今後のデータ活用とかそのリーズナブルにデータ利活用できる仕組みでは、すごくいいのかなと私は思っております。

それから先ほど、杉井さんがお話いただいたページのところで、68ページですが、まさしく、その集落というか中山間を意識しているというのはすごく私も賛成で、これは進めていくべきだと思っていますが、かたや国交省とかコンパクトシティとか標榜している中で、山口都市核が、中山間と都市核と、ある意味エッジになっていくわけで、エッジとしての付加価値というか、求められるものがあるので、そういったところもしっかり検討を加えていくと、非常に面白いプロジェクトになってくるのではないかと思ったので、これはコメントという形で入れさせていただきました。私からは以上です。

#### 【松野会長】

ありがとうございます。何かお尋ねになりたいことがありますか。濱田委員お願いします。

#### 【濱田委員】

こんにちは。3点ほどちょっとお話をさせていただきます。

まず1点目です。先ほどご紹介がありましたが、この協議会に参加している私の役目の中で、人材育成ですが、デジタル人材、DX を推進すべき人材育成という観点で、ジーズアカデミー、ユニット山口というのを先週の土曜日、新山口のメグリバで開講しました。これは、これから続けていくスマートシティが推進される下支えとしての人材をどう輩出していくのか、というところをテーマにしています。第1期生が12名参加いただいて、女性が3名で男性が9名。山口市の方がおよそ半分、下関、宇部、防府、周南、下松、という所から参加いただいておりますが、6か月のコースということで、我々としては技術者としてちゃんと送り出しをする。エンジニアとしてちゃんと送り出しをするということで、輩出をしていき、1年間、大体30人から50人くらいエンジニアを出していこうというふうに考えています。

それと2番目ですが、最終的なKPIの話が必要だという話で書いておられるのですが、なかなか難しいだと思のですが、KPIといいながらも、数値を持つというのは難しいと思うので、定量的に測っていかれないと、KPIの信用性がなくなっていく。そうすると例えば令和2年度、もう終わっていますが、数値自体がきちんと実態に沿っているかという気がします。できればちゃんと市民にアンケート調査といいますか、最近ではデジタルを使えば、かなりスピードアップできますし、コンパクトにできますので、そのようなものをちゃんと動かしながら、KPIを確認する。これはなにか、普及率というよりは、満足度みたいなものが一番だと思うのですが、そういったものを取っていかれてはいかがかでしょうかという気がしています。

それと3番目にお配りをさせていただきました、資料ですが、ハラハラドキドキしながら今日持ってきたのですが、勝手に借りました、松野会長のいただいた参考資料2も見ます。松野会長の資料、DXの定義というところで、デジタルを軸としたデジタルサイネージを図ることによって、ウェブサイトの集合体から脱皮し、組織を復活させることと書かれています。まさにここは悩んだところですが、今回の資料の中で、大変失礼ですが、どうも個別最適化をされている、個別最適を追求していくような、あり方が見受けられます。それは先ほど、アプリの話もありましたが、たくさんものを作ってしまうと、それぞれ別件というものをなくしたらDXの意味がない、というかもっと近道があるのと思うことがたくさんあるのですね。それに書きましたが、部分最適で分野の中でデジタル方式ということの発想ではなくて、市民の暮らしというのを真ん中において、それにつながっていくというか、その真ん中にあるのが、OSというか都市OS、ネットワーク、そういうのを真ん中において、これをだんだん充実させていくということのような気がしています。その充実させていくという仕方が、2枚目に書かせていただきましたが、これはどんどん進化していくものだというふうに思います。時間が経つとともに。決して出来上がったら100%というわけでもないし、時代のDXのはるか先に進む中でいくと、どんどん螺旋的に上っていく。それで進化していく。そこにそれぞれ、それぞれでまた進化したものが出てくる、これの歯車がかみ合うような真ん中の都市OSネットみたいなものがでてくるような、ちょっとイメージ図を作らせていただきました。こういうものをイラストで、少し表現を工夫なされているかなと思います。以上です。

【松野会長】

ありがとうございます。何かありますでしょうか。次に大田委員、お願いします。

【大田委員】

私も3点ほど、コンパクトに申し上げます。

まず最初に12ページの9つの色分けがしてありますが、その中で、子育て教育という言い方、言葉なのですが、両方その、大人から見た言い方、ベクトルが下に行くと、最近ですと、「子育て」と、子どもたちが自分で学習して、スマホであるとかどんどんや

っていつている環境がどんどん整っているの、出来れば「子育て」という言葉もあつたほうがいいのかなという気がしました。

それと2点目ですが、21ページ、市内企業のDX推進ということで、以前、簡単に申し上げたことがあるのですが、商工会議所の方で、DXの地域経済循環アプリという「やまっち」という名前に決まったのですが、地域経済循環アプリ、これ県に補助金をいただいて、NTTさんとか山銀さんとか一緒に取り組んでいますので、そういった取組をしておりますので、地産地消事業といいますか、市内で作られたもの、生産されたものを山口市内で消費していこうというアプリになっていますので、それもぜひ記述していただいたらありがたいなというふうに思っています。

それから、脱炭素のことなのですがKPIにも公共施設をどんどんやっていきますよという言葉はKPIにもあるのですが、意思表示が弱いというか、もっと積極的に公共施設、あるいは市内のいろいろな施設、脱炭素に向けて取り組んでいきますという、強い意思表示がHPに見られないのが残念かなと思いますので、その辺も力強く表記してほしいというのが3点です。以上です。

#### 【松野会長】

ありがとうございます。それでは永久委員、お願いします。

#### 【永久委員】

JA山口県の永久弘之と申します。よろしくお願ひいたします。

農業においてもデジタル技術の活用促進ということで、このような記事を載せていただいて、なかなか農業とデジタルというのは一般の市民の方にはつながらない部分ではないかなと思います。そのように感じているところです。こういった資料で開示していただくことによって、デジタルは農業の分野でいかに活用しているか、昔であれば、職人氣質の確固たる技術を持った方が、良い製品を作り上げるという、ある意味、特殊な部分を持っていたのですが、デジタルの活用によって、多くの生産者がそれに似た農産物を作ることができるようになったという面では、知らず知らずの間に農家の方もデジタルの恩恵をずいぶん受けているのだなということをつかっていたたく上で、大変ありがたい資料を提出していただいたなと思う次第です。私も、ちょっとお話ししましたが、デジタルという考え方からすれば、ある意味音痴な部類に入るのではないかと思います。こういった各分野からいろいろな資料が生まれて、中をじっくり見てみますと、私も知らず知らずのうちにデジタルの恩恵に携わっていたのだなということ、この資料で理解することができました。率先して、デジタルというのは、いろいろな情報が集まって、膨大な資料の中から、自分の求めるものがどのように突き詰めていくかというのが、一番デジタル音痴な人にとっては、難関ではないかと思うところですが、そういった普段の生活の中で、気づかないうちにデジタルの恩恵を受けていたとそんな理想な姿ができると、あらゆる年代層の方で、デジタルに拒絶反応を起こすような年代の方にも、こういった恩恵を広く周知できるのではないかなとそのよう

に思う次第です。私からの発言は以上です。ありがとうございました。

【松野会長】

次に、会田委員、お願いします。

【会田委員】

山口情報芸術センターの会田です。よろしく申し上げます。教育の分で、YCAMのことが取り上げられていただいて、スマートシティ推進ビジョン素案の15ページに、YCAMと連携した教育プログラムの推進ということで書いてあるのですが、松野先生の資料にもありましたが、もはやデジタルというのが一体何なのかを知るという段階は過ぎていて、どちらかという、そのデジタルネイチャーというか、デジタルネイティブな考え方が、そもそも発想のもとにデジタル的なプラットフォームを想定した様々な施策の発想をしていきたいと思いますということが前提になってくるということになるのだろうなと思っていて、期待される場所は、発想がデジタルを前提とした物事の考え方、民主主義の基本ですけれども、政策に民意を反映するという基本的な在り方において、物理的な投票所に行って紙に書いて投票するという以外の方法を選ばないという前提を、どうやって考えないといけないのかというような議論をもちろんしなくてはいけない事態になってきているのですね。当たり前ということではなくて、なぜそのデジタル化をできないのか、様々な問題、課題があって、出来ないわけですが、そうした発想の根本にデジタル的な視点がなければいけない状況になってきている。そういうところで、YCAMに期待されている教育というのが、いわゆるかつて言っていたメディアリテラシーというのではなくて、その発想方法に力を入れていくものでなくてはならないということが、我々現場ではいつも考えているところです。

そうした中で、こちら資料の「山口市スマートシティ推進ビジョン(兼)官民データ活用推進計画」の話ですが、すでにあるプラットフォームの中に個別にたまっているデータというのが共通で利活用できないというのが一番の問題ということがあったので、この中川委員の方からもありましたが共通の基盤、データベースの基盤、OSとして起動するようなそういったものが必要になってくる、それが一番重要だということがわかってきています。

そうした中で、個人データ利活用によるセキュリティの問題だとかプライバシーとは何かというような、データの利活用を前提とした社会でなかったら考えなくてよかった、紙で整理されているということを前提としたことで、あまり心配しなくてよかったようなことを、どのように心配事を取り除いていくのかということが、最大の課題になっていこうと予測しております。例えば、図書館の利活用に関する図書館組合が発表している中に、かつて図書館の利用履歴から個人の行動履歴をチェックして体制に反対しそうな人というのを挙げていくみたいなことがあったために、図書館ではプライバシーの保護というのを最大限に守らなければいけない事項としてあげている訳ですが、そうしたときに、心配されていたようなことは、デジタルな社会になった時に、本

当に心配はなくなるのかというようなことを、最大の課題になってくるだろうと。こちらのデータ活用推進計画の素案の49ページには、セキュリティおよび個人情報の適正な取扱いの確保ということが書いてありますが、12行目、13行目というところで、蓄積等の仕組みやルールを整備し、データ活用に係る地域住民の不安の払拭に努めることと書いてありますが、おそらくルール整備だけでは足りなくて、認識とか倫理とか常識とか言ったことのアップデートをするために、周知、広報に相当のコストをかけないと、本当の意味ではデジタル利活用をした社会というのは訪れないというふうに考えています。そうした努力というのは、今までは、恐らくみんなが喜んで参加してくれるようなデジタル社会はなかなか厳しいだろうなというふうに考えていたところでした。そうしたその広報、そうしたアップデートみたいなもの、常識のアップデートみたいなことに広報や周知にコストをかけるということがどこかに盛り込めればいいのではないかと思います。少し長くなりましたが以上です。

【松野会長】

どうもありがとうございます。何か他にありませんか。では次に田中委員をお願いします。

【田中委員】

山口観光コンベンション協会の田中です。よろしくお願ひいたします。49ページによくまとめていただいてありがとうございます。

観光分野においては、デジタル化された今あるデータや情報をまとめ、使いやすくしてDXを進めていただければと考えている次第です。旅前においては、人流調査と以前お話をしたことがあったのですが、先日県の観光連盟さんでも人流調査をされて、ビッグデータを取得されているということで、いろいろ情報を伺ったところですが、今後、市独自というよりも、県とのより連携したマーケティングに努めていただければありがたいかなと思っているのと、旅中においては現在実証実験中ですが、MaaSアプリ「ぶらやま」があって、市の方で実証実験中ですが、例えばそれを中心にしてイベントカレンダーをにおいて、踏み込むであるとか、これは児玉委員の方からご提案をいただいたわけですが、そういった情報を組み込む。また宿泊者の方や、宿泊日から2、3日間に行われるイベントや飲食店情報をプッシュ配信するとかそうしたことによって、観光消費の向上を図るということも考えてもいいのではないかなと思っております。それから最後に、先日、観光経済新聞というので、日本の温泉100選ということで、中間報告がありまして、昨年もそうですが、今年も湯田温泉が、ベスト100にも入っていないと。唯一県内で入っているのが、長門湯本です。昨年在り51位で、今年が46位の中間発表結果です。まだ最終結果は出ておりませんが、ベスト100に入っているのは、長門湯本だけと。まだまだ私ども協会の情報発信が足りないということがありますが、市民それぞれ皆さんが山口市の営業マン、セールスパーソンであってほしいなど。どんどん山口の良さ、湯田温泉があるのだというのを、発信していくような、

雰囲気醸成をしていただければありがたいかなと思います。私からは以上です。

【松野会長】

何かご質問とかありますか。では次に中島さんお願いします。

【中島委員】

レノファ山口の中島です。ありがとうございます。50ページの重点プロジェクト7に、おいでませ山口・観光地域づくりプロジェクトの中にレノファ山口のリソースを活用してということで、掲載していただいております。

具体的な取組例の中の(4)に市民や企業、地域団体等と連携した、地域循環共生圏の構築ということで、企業さんと地域とレノファ山口をつなぐというような趣旨のことを書いていただいていることについてですが、1つは、我々のJリーグ自体が環境省と連携協定を結びまして、環境省が進められているような、地域循環共生圏の構築というような取組を各地域でやっているのですが、そういった中で、今、我々も他の市町さんの取組を含めて、意識しているのが、地域循環共生圏と合わせて、似たようなことですが、地域経済システムという言葉もあるのですが、そのあたりのキーワードみたいなものが入っていたほうがいいかなと思いました。

我々が申し上げるのも大変失礼ですが、SDGs自体をコストとしてとらえている企業さんとかが非常に多いなと思っていて、そもそも経済肯定しているからサステナブルなのであって、なぜかコスト感覚も持っていて、SDGsをコストととらえていて進まない。これって、我々今、対面していて重要なキーワードではないかと思っています。少し付随するのですが、他の市町で公民連携、官民連携でやっているやり取りとして、さっき脱炭素系の話に絡むのですが、基本的に経済という言葉を使うとすると、市の外から中にお金を入れるか、市から出ていくお金を減らすか、どちらからもコストパフォーマンス出ると思います。今、化石燃料が国外に出て行っているのを、地域の中で循環させていくと、結果的に市の中から外に出ていくお金というのを減るものを地域の中で回せないかという取組を、再生エネルギーというもので、一緒にやっている取組があって、それは山口市でできるどうかは別問題として、経済のエコシステムだということを取り組んでいる方が企業さんも参画しやすいのではないかという点は、我々が実際に取り組んでいる取組の中でもしているので、経済エコシステムという言葉を使うほうがインプットしやすい、分かりやすいのかなと思いました。以上です。

【松野会長】

はい、ありがとうございました。何かありますか。よろしいですか。

割といいテンポで進んでおりまして、ここで15時から10分休憩の予定でしたが、ちょうどこちら半分が終わったので、今から10分ほど休憩を取ってから、また再開したいと思います。では、15時10分までよろしいですか。ではまた後ほど始めますので、



お願いします。

【松野会長】

それでは時間になりましたので、会議を再開させていただきます。意見交換も引き続き、行います。今度は鈴木委員からお願いします。

【鈴木委員】

山口市公共交通委員会の副委員長の鈴木です。私からは、感想めいたことになるかと思いますが、3点ほど申し上げたいと思います。

以前、交通に関してのご質問をさせていただいたときに、この山口市の公共交通の総合時刻表をデジタル化するだけでもかなりのものができるかと大口をたたきましたが、その考え方は変わっておりません。今まで交通に関して、いわゆるアナログベースで言いますと、かなり今までにいろいろな高度化を図ってきたつもりですし、一步一步ですが、いろんな面で改善をしてきたつもりです。そういう意味では、やはりベースとしてのものがしっかりしていないと、デジタル化をすること自体ができたとしても、基になるものがしっかりとしたものがなければ、それは絵に描いた餅になりますので、それがどういう分野になるかはともかくとして、やはりきちんとベースをしっかり構築していくことが必要かなと思っております。それと同時に交通の分野では、市と交通事業者と市民という関係の中で、これまで、信頼関係を作ることをかなり意識して取り組んできました。今後、デジタル化が進んだ時に、たとえばデータを出してもらう、あるいは表現するといった場面が必要になるかと思いますが、その時に信頼関係がないと、出してもらおうというようなことが難しい場面が出てくると思います。そういう意味では、やはりこれは、これもベースになるアナログの部分になりますが、その関係者の信頼関係というのがやはり構築していく必要があるのではないかというふうに思っています。それが1点です。

それから2点目は、今、公共交通の方では、大体2023年度末ぐらいを目途にバス、鉄道のICカード導入等に向けた取組をしていくところですが、これも導入そのものにもかなりコストがかかる話で、なかなかここに来てコロナ禍による減収などもあって、事業者の資金的な能力をかなり超える状況の中で、県であったり、市の各沿線市の補助等を見ながら、導入をしていくことになっているわけですが、もちろん導入の時のコストもそうなのですが、何かの機能を加えようとしてシステムを改修しようとする、またここでかなり機能がある。実は交通ICカード一つとっても、交通ICカードでできることは、単にバスや電車に乗ることだけでなく、いろいろな機能が考えられることは知られているところなのですが、ではこういうことにも使えそうだな、こういうことにも使えそうだなというのが単発でバラバラ出てきて、その都度システム改修するとするとこれは大変な話になってくるのです。そういうことを考えてみますと、一つのをどこまで活用できるかというのは、それは分野や内容によって、変わってくると思いますが、特に交通の立場から見たときには、それこそ観光だとか、医療だとか、教育

だとか、子育てだとか、様々なニーズは展開していく、そうだとすれば、やはり分野横断的な仕組みをちゃんと作っておくことによって、では一つのものをこの部分で活用しよう、あるいは逆に交通の方をここに寄せようと、そのようなことをちゃんと議論して、無駄なく展開できるような仕組みを作っていないと、かなり財政負担というか、コストだけがどんどん膨らんでいくようなことになりかねないのではないかという気がしています。そういう意味で、分野横断的な考え方が必要ではないかというのが2つ目の話です。

3つ目は、最初に話が出てきました、都市型の地域でない地域。過疎地域であったり、中山間地域のことなのですが、これも交通的にいうと、なかなか事業としては成り立たない、それから担い手が非常に不足しているというような観点から、十分な交通サービスを提供できていない部分というのがかなりあるというのが事実です。今後、そうはいつても、その地域のニーズにいかに対応していくかという中で、限られた資源をいかに有効活用するかということがこれからの大きなテーマになってきているのですが、これからデジタル化をしていくということの中で、かなりアナログで限界のあった部分をカバーできる可能性が、むしろこういった色々な地域の中ではあるのではないかなという気がしております。今回の資料の中でも交通に関しては、プロジェクトのトップに書いていただいたり、非常にありがたいところですが、うまくデジタル化と、それから限られた資源を有効活用しつつ、地域のレベルをあげていくということに、結び付けられればありがたいなというふうに思っております。資料のどこという話でなくて、全体的な感想めいたことですが、以上です。

**【松野会長】**

ありがとうございます。何かご質問等ありますか。次に児玉委員お願いします。

**【児玉委員】**

山口市医師会事務長の児玉と申します。私の方から、まず全般的なところで、これがご意見という形で受け止めていただいて構わないのですが、今この計画について、いろいろとプロジェクトを含めていろいろな記載がされております。先ほどから色々な委員さんのご意見もありますが、この計画の中で、ある程度、市民生活がどのように変わっているか、まずそのあたりを市民目線で見えるような形の記載が少し盛り込まれているといいのではないかと感じています。なかなかデジタル化って、見えにくい話なので、やはりそのデジタル化をして、では市民生活がどう変わっていくか、そこが市民にある程度、こういう姿になるのだという、そういうところがみえるような記述がちょっとあるといいのかなと感じました。

それから医療介護連携のところ、私の方から色々尽力させていただきましたが、医療関係のデジタル化というのはなかなか思うように進まないという状況の中で、具体的には16ページ、地域医療体制の充実とDXの推進と記載等ありますが、いろいろ基幹病院とそれから開業医、クリニックをつなぐシステムを展開しているのですが、

なかなか今医療の広域化をしていますので、たとえば医療圏ごとにそういうシステムが山口県も構築されております。県内で、7つか8つあると思いますが、そういったところで、今、実は圏域ごとにシステムが組まれている。そうすると圏域を超えているところも結構あります。例えば山口市で言いますと、山口市防府医療圏というそういうところで考えると、では宇部に行ったらそのデータというのはとっていけないという、そういう状況になると、そういうふうなところもごございます。

あるいは、コロナワクチンの関係でいろいろと話題に上っていますが、これも今、システムが3つか4つあるのです。最終的には、バーコードでデータを読み取りしたら、接種のデータが読み取れる。実際にこれを使って医療機関と接種データを積み上げていって、市の傾向を知る。ここで集約されているのですが、実はこのバーコード、読み間違いが結構あって、なかなか大変だと。で、たとえば国から降りてきたシステムなのですが、そのほかに、別のシステムがあって、そのデータのやり取りができない。横の連携ができていない。それから予約システムとの連絡ができていない。横の連携をよく考えて、システムというのは、検討していく必要があると感じております。そういったところで、バーコードは、読み取りがなかなか難しいと。今QRコードが出てますので、QRコードのほうがはるかに読み取りの間違いが少ないですし、簡単に読み取れると思っております。国も今度、3回目のワクチン接種がありますが、バーコードをQRコードのほうに追加をする中で、改変をされるというようなところもありますが、当初からそうしていたらよかったのかな、と思っております。

それから45ページに重点プロジェクトということで、健康いきいきプロジェクト。こういったところで、アナログ手帳をいろいろとデジタル化によって、データを蓄積していくということで、いろいろなところで、このデータを活用してというのは、これは非常にいいことだというふうに思っています。このようなやはりいろいろなところで、アナログのものを、デジタル化して、それがいろいろなところで、有効活用される、そういうふうな形のシステムというかそういう形にしていくのが、一番いい。やれるところから、介護の連携が進むようなそういう取組というのをしっかりやっていければいいかなというふうに感じたところです。以上です。

【松野会長】

何かありますか。では次に高田委員お願いします。

【高田委員】

NPO 法人ほほえみの郷トイトイの高田です。よろしくお願いします。

私たちの地域は中山間地域といわれる地域ですが、先ほど皆さんからもありましたが、山口市の中心部と比べてまったく状況が違うというところがたくさんあります。デジタル化を進めていただくことで、高齢者の皆さんが安心して暮らせるということが非常に望ましいと思っておりますが、私たちの地域でいろいろな取組をする中で、特に高齢者の皆さんが、今の現状を受け入れてその地域で暮らすということに対して、あきらめ

ではなくて、前向きにこの地域でこうやって生きていくんだという覚悟をもって暮らしている方が多い。その方たちに新しい仕組みをいかに提供するかは非常に難しく、これを便利だとわかっている、今更それを使わなくてもこうやって生きてきたからいいよという言葉もよく聞いたりします。なので、私たちもいろいろ考えながら、デジタル化の恩恵を知らず知らずのうちに受けていただく。もともと、農村地域には非常に強いコミュニティがあって、コミュニティの中で支えあって、課題を解決してきたという、いろいろな生活の知恵もありますから、ただそのコミュニティが人口が減少すること、高齢化が進んで、高齢者の皆さんの行動範囲が狭くなることによって、もともとあったコミュニティがなかなか維持できなくなる。なので、その維持できにくいコミュニティに対して、いろいろ新しい技術を使って、そのコミュニティをしっかりと持続させていくということが非常に中山間地域では必要なのではないかと考えています。

この提案プロジェクトの中でも、46ページに中山間地域における高齢者支援体制の構築というのがありますが、デジタル健康手帳とかを導入するとしても、なかなか使えない世代もまだまだたくさんおられて、その方たちに言われて、それを使うことで、イメージしてもらおう。だからたぶん、皆さんが求められているのは便利さではなくて、いかにこの地域で安心して暮らすかということだと思いますので、以前の会議からも皆さんの中から意見が出ていると思いますが、スマートシティというのを推進する、それから新しい技術を導入することで、自然に幸せになるのではなくて、どのように地域の皆さんが暮らしたい、どのように幸せを求めているのかという、その人の考え方を中心において技術を使っていくということ、ぜひ山口市の方でも進めていただくと、人口が減ってきている我々のような地域にとっても、未来への希望というものが出てくると思います。

もう1つ、子育てのところで、親が活躍できるまちというのがあって、子育ての世代の方にとってのイメージだと思いますが、中山間地域の我々からすると、そういう地域、故郷において、親が外に出て働いている方が非常に多い。外に出て働いている方が自分の親の暮らしを安心できるようにしっかりとつないでいくことが、もしかすると将来、故郷に帰って暮らしたいと思うことにつながるかもしれないので、そのあたりがどこかしらで、この中でも離れて暮らす家族というのが出ていますが、しっかりとそういうところに関しては、デジタル化を進めることで共有出来たり、離れて暮らしていながらも、山間部においている自分の親であったり、祖母であったりという暮らしがわかって、山口市で親が暮らしているということに対して非常に安心できる地域だとなると、またその地域の価値というのが高まっていくのではないかなというふうに思っています。

全般的な意見ではなくて、中山間に特化した、私の方から意見を述べさせていただきました。以上です。

【松野会長】

はい、ありがとうございました。何かありますか。

それでは藤井委員お願いします。

【藤井委員】

NPO 法人あつとの藤井です。子育てという目線から、少し意見を言いたいと思います。

まずは山口市の研修で松野先生の DX のお話を私も視聴させていただきました。話の中に、何度も、DX は覚悟が必要だということとか、組織の変革というのを強く言っていて、そこが、今回説明があったプロジェクトの中にしっかり盛り込まれたらいいなと思うことと、皆さんも言われている横軸、縦の方はどんどん充実していくのではないかと思うのですが、それを横軸で見たときに、どうなるのかなというのは感じました。

また、このスマートシティの考え方の中に、最初の方の会議にあったのですが、生活者目線をもって、考えていくべきではないかという話があったと思います。私と会田委員で勉強させていただいたカスタマージャーニーマップ、A3の用紙ご覧になっていただきたいのですが、子育て世代を対象にした、困っていることとか、課題や対応策というのをまとめてあります。その課題をみていただきましたときに、財布を持ちたくないとか、献立を考えるのが大変、ごみ捨てが遠い、重いとか、そういった意見を見たときに、お母さんだから仕方ないよねと思われるのではなくて、毎日赤ちゃんとか、子育てをしているお母さんで、切実なのです。そういった生活者目線で感じるのが、そういった生活者目線で課題と思っていることが、このプロジェクトの中で解決、どのようにしていけるのかなというところは、一つ一つ見ていきたいなということと、男性ばかりの会議で発言するのも失礼なのですが、このカスタマージャーニーマップの話の中で、女性たちはやっぱり世の中、男性主体でいろいろ制度が決定されたり、男性目線で作られたものが多く、そこに私たちはあてはめられている。なので、やっぱり使いにくいというところが出てくるんじゃない、という話が出ました。そういったところから、35ページですね、ビジョン計画の35ページのところの黄色い部分に、下の方にもあるのですが、子育てを通じて得た経験や知識を仕事や地域活動等へ生かすというところにつなげて、女性もしっかり、こういう制度とかを作ることにもしっかり生活者目線をもって入っていく、それが子育てがアドバンテージになるまちづくりにつながるのではないかなと感じました。ですので、そのプロジェクト、たくさんあるプロジェクト、生活者目線をもっている女性たちや高齢者などもしっかりと参画して一緒に考えていける仕組みになったらいいなと感じました。以上です。

【松野会長】

はい、ありがとうございます。なにかありますか。委員の方はこれで終わりますが、オブザーバーとして4名の方に参加していただいておりますので、ご意見を伺いたいと思います。田中さんからお願いします。

【田中オブザーバー】

デジタル技術振興財団の未来技術活用統括監の田中と申します。私の方からは2点です。

まず資料の方でもご紹介いただきましたが、26ページですね。山口県と連携したDXの推進というところで、正式には、もう少ししたら、リリースをさせていただく形になるかと思いますが、山口県の取組として、山口デジタル改革の委託の中で、DXの推進ということで、この秋、DX推進拠点という形で、報告します。その目的としては県内のDXの推進に向けてやはりどういうふうにDXを進めていけばいいかわからないとか、実際にスキルだったり、その情報を実際に取り組みうえでの試算ですね、どういうふうなことをしたらいいかわからないというところを支援することによって、現在のDXを進めていく支援をするという形で、拠点の方を整理しているところ

です。  
全般におきましては、実際にご相談を受けることができる委託担当を配備しながら、またY-Cloudという形で呼んでいますが、各種DXを進めるうえでのツールですね、分析ツールであったり、AIを活用したような実証ができるような環境を含めて、構築の方を進めようとしているところです。この拠点を県全体で民間企業、自治体の皆さんにぜひ活用いただきながら、県内のDXの推進を進めていきたいというふうに考えています。

今、スマートシティの関係に置きましても、山口市等とも、いろいろ事前の話をさせていただく形になっておりますが、いろいろプロジェクトが進んでいる中で、県の方ともいろいろ連携させていただきながら進めていければなあというふうに思っているところ

です。  
あと1点、これと並行して、県の方で、官民連携のフォーラムということで、デジテック for 山口という会員制組織を立ち上げています。官民連携の組織を立ち上げまして、山口市も、ご参加いただいているところです。実際に今、この会員制の組織、6月に立ち上がりましたが、会員の方は400名を超える個人の方、団体の方が参加をされています。目的として、山口県に貢献したい。山口県におけるそのデジタルの推進に貢献したい、課題を持っているがそれを解決していきたいという、皆様が集まっている組織です。ぜひこの組織、皆様のお力をお借りしながら、山口県全体の課題解決に取り組んでいきたいということですので、このような組織を含めて、山口市の取組と一緒に、この取り組みも活性化させていければなあというふうに思っている

ので、よろしく願いいたします。  
2点目です。今その、私どもの方で取り組んでいこうと思っているところですが、実際にいろいろなプロジェクトの方、今立ち上げて進められようと思っております。県の方でもいろいろプロジェクトを今、立ち上げて進めようと思っておりますが、やはりこれだけ、データの重要性、データドリブンが試作をされていく中で、実際にこの試作を行った、プロジェクトを実施した内容について、市でデータを用いて振り返られるようにしっかりデータを取得しておかないといけないなということをプロジェクトメンバ

一の中で話しているところです。ただ山口市の皆さんの方もそれを意識されてらっしゃると思うのですが、実際にこの施策、KPI のところもありますけれども、実際にそれを評価するために、どういうデータを取っておけばいいかということについては、実際に実行段階だと思うのですが、しっかりそこは議論したうえで、データを蓄積してそれで評価していけるという、形にしていく必要があるかなというふうに、我々も考えていますので、そちらの方、話させていただきました。

あともう1点、県の取組の中で、シビックテックの活動であるとか、市民エンジニアさんの力も借りて活動をしているところではあるのですが、やはりいきなりすべて100点という、このシステムというのは難しいところかなと思います。今世の中で、アジャイル的な考え方その、トライアンドエラーで実際にアプリケーションの中を改善していくという、場面もありますので、実際にこのプロジェクトでつくったアプリケーションなり、そのサービスというものについては、今までは作ったらゴールみたいなイメージがあったと思うのですが、逆に作ってから開始というところが今後こういうふうなサービスを提供していく上では重要なことかなというふうに考えておりますので、そこを継続的に改善できるようなスキルなり、活動なりというものを意識していく必要があるかなというふうに、日頃、思っているところもありましたので、話をさせていただきました。私からは以上です。

#### 【松野会長】

はい、ありがとうございます。なにかありますか。  
では次、松田さんからお願いします。

#### 【松田オブザーバー】

三菱総合研究所の松田です。これまでオンラインでの出席でしたが、今日は画面から飛び出してきて、2年ぶりに山口に来ました。

オブザーバーとして、もし私がこれをスーパーシティやスマートシティの審査をする場としてやった場合に、どういうことが論点になるかという、気になるのは、手段、主語になるということです。DX は手段であって、市民主語になっているかどうかというところが分かれてくる。これによって、生活者の暮らしがどう変わるかというのがあいまいであるということです。

例えば、スマートシティが実現されたある日の一日というのを、子ども、若者、子育て世代、シニアの世代別で、ストーリー性を持っているか、あるいは山口は日本の国土型というのかな、中心市街地もあれば、近郊もあれば、中山間地もあって、エリア型でのある一日というのをストーリー性、例えば1分の動画でもいいので、できないかなということ。

それから効果の定量化があいまいであるということです。KPI がその、よいと思った人が増えるですとか、主観的な部分が多い感じがします。これは雇用が生まれるのか、税収が生まれるのか、地元の大学の県外流出が何パーセント増えるか、あるいは

行った人の帰ってくるUターン率がどうなのか、子育て書いてあるからには、出生率書いていましたか、あるいは、医療費の削減の幅ですとか、健康寿命の延伸というもう少しリアルなデータ、主観的なものだけでなく。それから規制緩和への要望がない。スーパーシティはもう突っ返されたらやり直しになったら、規制緩和が少ないから、ハイテクの見本市になっているところであって、規制緩和の要望、もっと交通医療農業、いくらでもあるのですよね。規制緩和がなんででてないかということです。最後は防災に対してちょっと弱いのではないかと思います。多くの自治体は、災害です。最近の問題は、山口災害が少ないといえるのもインフラの経年劣化、地中の管ですとか、経年劣化大きな問題ですので、防災に弱いということと、以上がオブザーバーとして気になったところです。

【松野会長】

ありがとうございます。何かありますか。  
次に須原さん、お願いします。

【須原オブザーバー】

皆様、いつもありがとうございます。ちょうど、毎週水曜日に山口に通うようになりまして、去年の9月からちょうど1年を過ぎました。山口、だんだん私、個人的には第2の故郷になっております。本当にありがとうございます。他の地域、10都市くらい関わっている関係で、例として、参考例としてお話をさせていただければと思います。

大阪府のスマートシティ戦略部、私アドバイザー、やらせていただいております、その中でまず一つ、これは推進委員のメンバーの方にはリンク等をお送りしておりますが、大阪府の一番北にある豊能町というところ、1万9千人くらいのまちだけを切り取りまして、リトルエストニアプロジェクトということで、吉村府知事直轄でやらせていただいております。こちらのことに関しましては、今回、デジタル連携型スマートシティ推進事業として内閣府総務省、国土交通省に選定をされまして、先々月、キックオフをし、実は昨日、豊能町、現場に行ってきた、約民間企業15社くらいと一緒に連携して今後どうするかという話をしてきたところです。この情報に関しましては、コンパクトスマートシティプラットフォーム協議会を作っております、こちら一般公開もしております。全部の今までの申請書等とかも一般公開をしてなにをやっているかというのをしております。目的というのが大阪でやっていることというのを、全部外に出して一緒にやろうということが目的でありました。なんで豊能町みたいな北の端っこを選んだかという、大阪の町中をやったところで、他のところに参考にならないということがありまして、どういうところかといいますと、豊能町の東側が阿東です。右側が阿東で左側が宮野です。そんな感じです。なので、宮野までは電車が通っている。右側の阿東の方には電車があまりないということで、過疎化が急速に進んでいるというデジタル化だけではどうにもならないという町をわざと選んでやっていくことをやっております。



その中で今やっていることというのは、松田アドバイザーがおっしゃっていた通りで、言葉というのを、5ページにいきいきとか、豊かにとかあるのですが、こういった言葉遣いというのは、結構各都市の表現として使われるのですが、それって要素分解しましたっていう、どう意味でしょうかというところ、誰に向けてですかというところ。先ほどからペルソナという言葉を使っていますが、対象者というところ、その対象者の人たちを男女分けて、世代を分けて、お子さんを持っている、持っていないで分けて、いろいろ細かく分けてから、いわゆるカスタマージャーニーマップとっていますが、いわゆる生活の物語化までストーリーができてという話ですが、生活の物語化をしていて、それに対してデジタルジャーニーマップを作るというような話を田中さんがおっしゃっていましたが、それって何かといいますと、何をDXにするという話になる。まとめると、いきいきという言葉なんかを要素分解して、その対象はだれとして、それを生活の物語化してあって、今ある技術で何できる、それで十分だったらそれでどうする。まず使い倒してみよう。足りなかったら新しいものを作ってみようというようなことをやっていてどうするかという、を進めるというのを着々と進めるということをしてながら、あとはどういう未来を作りたいのかといったところも、さっきの対象者の人たちに聞いてあって、そこからやっていきたいと思いますというところで、まさに高田さんがおっしゃっていたように、阿東の人たちとかにしても、外に出ちゃった、要するに山口から離れちゃった人たちがいるわけで、その人たちをどうつなげるかというのが必要なんじゃないかというところ。です。

私、福島県の大熊町という原発のある町のアドバイザーをしまして、ここ皆さん離散しているじゃないですか、住んでいる人も住民票もあるのですが、住んでいない人もあるので、それで要するにサポーターみたいな感じの、デジタル化みたいなものを作ろうと、まさにレノファさんがやっているみたいな、Jリーグサポーターみたいなもの。つまり大熊町ファンみたいな形でみんながまとまる。こういった面でもレノファさんが使えるのかなと僕は思っているのがいつも山口を忘れない、横浜に住んでいようが、仙台に住んでいようが、山口が心のふるさとみたいな形で外につなげるというのができたら面白いかなと思います。

じゃあ山口でどんなことをさせていたかというところ、さっきの大阪の例をちょっと見ると、やっぱりスマホを使えない人が多いですよ。豊能町とかに行くと本当に。そこで何かをしようとしてもどうせ実験、つまりまず決まったことですが、どうするかと思ったら、大学を使おうと。大学生はみんなスマホを持っている。近畿大学さん、東大阪市の近畿大学さん、キャンパスに2万人いる。ということは豊能町より人口多いので、そこで大学生目線でそういったデジタル条件のものを実験してもらって、不具合直して、使えるものをという。

あと、IT難民になっているおじいちゃんおばあちゃんどうするかというところ。これはエストニアの事例ですが大学生や高校生がボランティアで教える。そこアナログです。なので、そういったことも含めて、東大阪市と豊能町と連絡してやってみようかという話、というのをたぶん山口都市核と阿東、徳地とか徳佐とかいろいろできるので

はないかというふうなことも考えています。そういう技術のところ、人が足りないだろというところがあるので、こちらの方、濱田さんとか会田さんとかご相談させてもらって、やっているのが簡単に言うと、渋谷のデジタル関係の企業をメグリバに移します。持ってきます。今一緒にプロジェクトをやっている連中なんかをもってきて、たまたま今回、札幌のデジタルハリウッドの拠点があるところ、ジーズアカデミーがあるところの札幌ドラッグストアの仕事と今ちょうど山口の仕事をさせていただいているので、ちょうどまさに、濱田さんがジーズアカデミーをメグリバで始めたということなので、札幌、東京、渋谷、大阪あと山口をつないだ形のものを作ることをしております。

あと、今できることで、何かやろうということで、明後日レノファのリモート応援会というのをはじめてやるということで、デジタルではないのですが、まずはそういった、小さいことから始めていって、やっぱり山口一番ということで、地元愛中心にして、受けたらなということをやらせていただいているところです。

なので、情報源に今後ともなれば、レノファさんであったり、コアさんであったりとか、YCAMさんであったりとか、あとはトイトイさんとか、あっとさん、ノウコウダーミンさんの話ですとか、お母さん方の就職に資するように、こういったデジタル技術なんかの講習会とかもできるようにしないといけないというのを、メグリバのメンバーと市の職員といろいろとサポートいただいておりますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

#### 【松野会長】

はい、ありがとうございます。なにかございますか。

では最後に財間さんお願いします。

#### 【財間オブザーバー】

松田さんと同じく、リアルでの初めての参加となりました。三井不動産の財間と申します。よろしくお願いいたします。

全体を通して感じたところ、細かいところをいくつかお話したいと思いますが、まず全体を通して感じたのがどうしても市の掲げるビジョンなので、こういう書きっぷりにならざるを得ないのかなと思いつつも、行動主体が「シーン」に見えてしまうのですね。おそらくもっと市民、住民が自分たちで取り組んでいけること、取り組むこと、民間事業者が率先して取り組んでいくこと、行っていくこと、多分そういうところが必ずあるはずだと思いますし、そういうメッセージをもう少し出せないかなという印象を受けました。そうすると若干、難しくなってくるのが、この中でデータの取り扱い、活用推進計画まさにここになってくるのかなという気がしていて、公共主体が公益目的で集めるデータと管理運営運用と、民間事業者がそれを使うときの、もともとデータ集めるときの目的との整合性だとか、多分単純に流用することができないでしょうから、取得と管理とデータの加工ですね、そのあたりの管理監督、信頼性をどういうふうに担保するのかということ、絡んでくるので、若干難しい議論に入っていくなあと感じながら

らも、全体の印象はそういう感じです。

細かいところという意味で言うと、これも何人かの方から出ていたのですが、私も出ているそれぞれの KPI とか活動指標というのが若干気になっていて、特に KPI、活動指標の項目は毎年度見直しや追加を行う云々というコメントも若干気になっていて、多分、民間からすると KPI って、そのプロジェクトの投資効率って言うてはいけないか、いいか悪いかの結果を判断するものだと思うのですが、まず一義的には。てことは、行うプロジェクトそのものをより強化すべきなのか、もうやめた方がいいというやめるための判断材料としても使えるはずなので、そういう取り扱いのものだということをもう少し明確に位置付けたいなという気がします。毎年度見直しや追加を行うというのは、おそらく KPI が活動指標の項目を見るのではなく、プロジェクトそのものを見直していくべき話かなと思いますので、ちょっと書きぶりが違うのか、私の解釈が間違っているのか、そんな印象です。

もう一つは、時間が経つにつれて、高齢者の方、特に変化していくので、社会的な課題とか全部変わっていくし、デジタルという意味での技術的なものもどんどん変化、進化していくでしょうから、そういう意味では毎年度見直しや追加というのはその通りだと思うのですが、その辺の変化に対応した柔軟性をもう少し持ちたいな、というか柔軟的な考え方をもっておきたいなという印象を受けました。以上です。

#### 【松野会長】

ありがとうございました。以上で、ここにご参加いただいている皆さんから一人ずつ、コメントとかご意見をいただきました。時間が4時手前になっているのですけれど、僕も後でしゃべりたいこともありますし、これからご意見をちょっとお聞きしたいので、少し延長させてもらってもいいですか。ではそういうふうに進めさせていただきます。何かあの、今皆さんに話をさせていただきましたが、ご意見とか全体聞いてありましたらお願いします。どうぞ。

#### 【A 委員】

1点ちょっと言い忘れていたことがあって、付け加えさせていただきたいのですが、かなり以前から、会長が言っていたデータの横連携、皆さんもおっしゃったと思うのですが、データの横連携、それからデータをいかに活用するか、という点がこの会議でも共通理解になっているのではないかなと思ったのですが、今日見させていただいている資料1を見ると、それが最後の方に出てくるのですが、私の意見としてはもう少し前にもって来るべきではないかという気がしました。

というのはですね、濱田委員が言われていたように、個別になっているけど、全体の最適化になっていないのではないかというのは、個別のプロジェクトをまとめるようなものが、説明としてちょっと少ないのかなというふうに思ったのですね。皆さん言われているように、データの横連携が非常に重要になる。そこが気になるというふうには言われていました。ですので、データの横連携をしつつ、セキュリティ的にも、セキュリテ

イを守りつつ、有効活用していくのが、山口市のスマート推進ビジョンだというような主張になると、私はもっといいのではないかと、いうふうに思いました。なかなかデータ連携、データ活用というのは、見えないところですし、一般の方々は非常に不安になるところだと思うので、やはり、セキュリティの面というのをいかに説明できるか、ということです。これ重要になる。そういう意味で、オブザーバー田中さんが言われたように、どういう意味未来が描けるのかということですね、そのデータ活用をうまくすることで、どんな未来が描けるのか、というところをきちんと説明できるとよりよくなるのかなと思います。

【松野会長】

はい、ありがとうございます。他に何か、どうぞB委員。

【B委員】

先ほど、指標の話もその通りだと思うのですが、そもそも、今現在、山口市のデジタルレベルがどれくらいなのか、そこをちょっとリアルにしないと、指標自体、KPIも描けないのではないかと僕は思うのです。山口市は本当に広いですし、住環境も違いますし、二つの都市核という言い方もされているのに、新山口とこの山口というのを、少し解析ができるような、なにかベースを作ってからスタートするというようなことをしていかないと、ひとまとめでDXというのは、ちょっとやっぱり難しいなというような気がします。

【松野会長】

はい、Cオブザーバー。

【Cオブザーバー】

はい、ありがとうございます。少し足させていただくと、私一年間、見させていただいて、だんだんと土地勘が出てきて、びっくりしたのが、阿知須の方だとか、新山口、小郡、こっちも吉敷にしても、大内にしても、宮野にしても、阿東徳佐にしても、別の国というぐらい、山口市ってバラエティに富んでいるなという。私千葉の出身なので、千葉ってのっぺりしていて、結構どこも似たような感じなのです。それに比べるとすごくバラエティに富んでいるなというふうに思って、それで聞くと、もともと違うという。

まさにいろんな地域でのニーズと、いろいろ各地域での、デジタル、ITに対するリテラシーというようなものとか、というのもずいぶん違うのかなというのを、実感として感じます。何が言いたいのかといいますと、今、他の地域でも言っているのですが、よく、産官学、官民連携という順番になっているのですが、うまくデジタル化というか、社会のIT化が進んでいるところは、大学が結構中心なのです。ご存じのように、シリコンバレーのバークレイとか、スタンフォードとかがあって、じつは順番が産官学ではなくて、学産官ですね。なので、学校とか、例えば今おっしゃったように、今の状況がどうな

のかということをしかりリサーチして、データというか情報があつたうえで、そこから民間企業がどんなチャンスがあるのかということを経って、それがやりやすいように、官が石をどける、もしくは新しい川を引くみたいなことをやられているというところがうまくいっているなと思います。そういった点でも一度、山口市ってダイバーシティがあるところなので、そういった面で、一回調査をされて、大学と連携をしてまさに松野先生みたいな専門家がいらっしゃるので、データファイナンスという言葉、やっぱり今の社会には、その男中心の社会で、そのままやっていると、そのまま維持する、では将来どういった社会を作りたいかというところをやっぱりアカデミーの先生を混ぜた形で、あとはさっき言った、ペルソナ、対象者の意見を入れた形で、何か作って、逆算するというのが一回あってから、そこをスタートで、次指標というのがあるのかなという感じです。以上です。

#### 【松野会長】

はい、ありがとうございます。他何かありますでしょうか。よろしいですかね。では僕の方から、少し話をさせていただきたいと思います。

資料としては、お手元の参考資料の2、DXを主軸としたスマート“ライブ”シティの創造というのが、それをちょっと出していただければと思います。これはさっき、話がありましたように、9月27日に市役所の研究会で話をさせてもらいまして、9月のはじめくらいのもので、これはどこに渡されてもかまいませんので、使ってもらっても大丈夫です。90人くらい、特に若い人たちに話をさせてもらいました。ですけど、組織としてこういうを進めていくためにはやはり、部課長さんとか、市長さんとかが動かしていかなるでしょうかから、もしお邪魔でなかったら、そういう人たちにも話をさせていただくといいかなと。どうして若い人かといいますと、うちの大学でもこれからDXやりますが、僕らが出ていってもダメなんです。もうすぐ退職でいなくなりますから。次世代の人達に真剣に考えてもらって、上の人たちはその人たちにある程度権限を渡して、文句は言わないというふうなステップを取っていくというのが大事で、あの時市役所の方に言いましたのは、そのために必要なのは覚悟です。そういうふうにするのだと、これは組織を変えるということなので、かなり大変な作業ですけども、そういう話をさせていただきました。

簡単なことではないですが、DXというのはそういうものです。それでまずここに示させていただきましたが、まず、下からデジタイゼーション、この図で右の方に小さくなっていますが、その下にデジタルライゼーション、その上にデジタルトランスフォーメーションとあります。この区別をまずちゃんとつけるということです。基本です。デジタイゼーションは昔アナログの携帯電話だったものがデジタルに変わりました。で、それらiモードとか写メとか出てきましたが、当時の言葉。これはデジタイゼーションをやったからできたことです。その次がデジタルライゼーション、どこが違うかという、業務とか、プロセスとかをデジタル化します。下のアナログのものを単にデジタルにするだけ

だったのですが、これは業務です。その上がデジタルトランスフォーメーション。デジタルトランスフォーメーションというのは何かというのを、簡単に説明するために、スライドを送ってもらいます。これ、ご存じですよ。スーパーとかに行くと、バーコードをピッとやると、これがなかなか通らないので、いやになったのですが、これ何かと聞いてみると、そもそも昔はレジ打ちのスタッフの人がいて、値段を見てこうやって打っていたのですが、これがいつの間にか、バーコードをピッとやったら、計算して、それでお金を入れたら清算できるということです。これってもともとレジ打ちのやつをそのお客さんたちにしてもらうためのシステムなのです。レジ打ちの考え方は全く変わっていない。ちょっと送ってもらうとこれはデジタルイゼーションです。レジ打ちというプロセスをデジタル化しただけで、もっと言うと誰のためかという、スーパーの、お店のためです。人減らしたから。これはデジタルイゼーションの典型。では物を買うというのを、どうやったらデジタルトランスフォーメーションになるかという、アマゾンゴーというらしいですが、アメリカの方で、右から人が入って行きますが、店の中に入って行って物を買うと、そのまま持って決済する。これは何のためかという、消費者のためです。これを実現しようと思ったら、おそらく店の中に入って、まずその人がだれかというのをやらないといけないし、物を買うとき、どの物を買ったというのを自動的にやらないといけないから、裏で情報システムが動いているのです。これだけのものを作ろうとすると、相当なものをつぎ込んで、お金も、知恵も、技術もつぎ込んでやらないとできない。これまでやればデジタルトランスフォーメーション。だからここに小さく書いてありますが、そもそもデジタルトランスフォーメーションというのは、変革なんですよ。ここを間違えないようにする。よくものを見ると、デジタルトランスフォーメーション、DXを単にデジタル化の意味で使っているものがものすごくたくさんある。むしろそう思っている人のほうが、どうやら多い。ここをまず、さっきの、デジタルイゼーションとデジタルイゼーションとデジタルトランスフォーメーション、どこをやっているのかということをもっと認識する必要がある、ということが言いたい。

その次にDXの定義とあります。ここ、枠の中に書いてありますが、定義は僕なりの定義ですが、デジタルを軸とした全体最適化を図ることによって、部分最適の集合体から脱却し、組織を変革することということです。全体最適の話とかは、今もいろんな人からの話が出ていました。これですね、イメージからすると、今もどうということかという、今日の話の中でも市の重点プロジェクトとか今やっていることの中でも、個別のデジタルイゼーションが並べてあるのです。だけどそれで、全体って何をやるのかということが、そこまでいくとDXになります。右の方に絵がありますが、要するに今やっているのは、山口市さんに限らず、多くのことがこうなのですが、デジタルイゼーションが多いです。つまり木を育てて、木を見て森を見ずの状況になっている。本当は全体最適化をすることがDXなので、木を育てて森を造る、そういう考え方でやる、ということが大事です。それで次捲っていただくと、裏の方に、『スマート“ライブ”シティ山口市』の創造というのを書いています。中に書いているのは、まず一つ、今回スマートシティでやっていますが、同時に山口市さんは山口市の組織のデジタル化を進められて

いると思います。スマート自治体と言うのですかね。これは一体的にやらないといけません。そもそも山口市さん、行政のところにはいろいろなデータがたまっています。情報もたまっています。それは市民の生活と直結しているはずなので、スマート自治体の話と、スマートシティの話は一体的に動かす必要がある。そのうえで、下の図を見てもらいたいのですが、これは今回、資料の1のところに出ています、例えば12ページの絵ですね、この絵と前の方の、5ページのところにある絵を、これあらかじめ、ちょっと山口市さんからもらいましたので、それを基に私なりにDXふうアレンジしたものです。これさっき、杉井委員が言っていましたが、今回のこの分では、後ろの方に、DXに係る話があるのです。要するにこれで言うと、66ページのところに重点プロジェクト13のところ、データ連携基盤の構築、これがまさにその全体最適をするための基盤なので、まずこの話を意識する必要があって、これを意識して書き直したのがこれです。下の方にあるのは、デジタル化、デジタルイゼーション。今日出ている、今日話いただいたのは、デジタルイゼーションがそのいっぱい実行されます。で今度、そこをデジタル化したことのデータをその上にそれぞれ三つ矢印がありますが、これを都市OSのところで横連携します。ここで。さらにたまったデータをビッグデータ解析とか、AIを活用して、ここで新たなやりたいことは大きく変わって、2つなのです。1つは組織を見直して、そこで出てきた、無駄とかを省いて、余剰でなはないですが、それをもっと付加価値の高い仕事に振り分ける。という業務の効率化。あともう一つは、データを使って新しい価値を作るということです。それでより市民の生活をよくしていく。その価値を見出すということがAIのできることなので、そういうふうを活用していくということです。データの横連携とデータを統合してやるというのは、そのために非常に重要なことです。それを今度どうするかというと、そこにDXというのがありますが、目的はもともとスマート“ライフ”シティというのを作りたいのですよね。誰もがいきいきと豊かに暮らせる持続可能なまちというのがビジョンでそれを実現するために、デジタルイゼーション、デジタルイゼーションで、データを集めてそれを都市OSに乗せて横連携をして、ビッグデータ解析、AIとかやって、それをやること自身がDXなので、それでビジョンを達成するということです。ぜひちょっと最初に、杉井委員も言っていましたが、このことを掲げてほしいというのが、私の考えていることで、そういうふうにとちょっと、市役所の方ともこれから最終バージョンを作るときには、やらせていただければなというふうに思っております。今日出された資料3の素案とか、これをぜんぜんそのまま使えると思います。いかにこれを全体的に俯瞰できるということが、全体最適の面から俯瞰できるかということが、これからやるべきことなので、そういうふうに進めていきたいというふうに考えております。ちょっと、話させていただきましたが、何かご質問等ありますか。それで、特になければ、そういうふうにと、あとはスマート推進室のほうと私の方とでまた、最終バージョンのようなものを作らせていただければと思います。

それでは、今後の日程のところに行きたいと思います。これは市役所の方からよろしいですか。

|      |  |
|------|--|
|      | <p><u>4 次回の日程</u></p> <p>【事務局】</p> <p>では、今後の日程ですが、先ほど、説明の中でも申し上げましたが、第8回推進協議会につきましては、令和4年の1月19日、水曜日、10時から、場所は防長苑の方で開催を予定しております。詳細につきましては改めて、ご案内差し上げたいと思います。ただ、今回、発言しきれなかったご意見等につきましては、お手元の資料6の意見書等にご記入していただいて、また事務局の方にご提出いただければと思います。以上です。</p> <p>【松野会長】</p> <p>はい、どうもありがとうございます。ここまで、会議全体として、何かご意見とかありますでしょうか。では、大体20分前に終わりそうですが、ないようでしたら、以上を持ちまして、今回の会議を終了させていただきます。どうもありがとうございました。</p> <p>【事務局】</p> <p>失礼いたします。委員の皆様方には当初の予定の時間を超えて長時間にわたりご協議いただきまして、ありがとうございます。さまざまなご意見、ご提言、それからまた宿題をいただいたというふうに思っていますので、次回の会議までには、会長さんとも協議をさせていただきまして、また次回、ご提案させていただきたいと思っております。本日は、長時間にわたり、どうも、ありがとうございました。</p> <p><u>5 閉会</u></p> |
| 配布資料 | <p>次第</p> <p>資料1 山口市スマートシティ推進ビジョン(兼)官民データ活用推進計画(素案)について</p> <p>資料2 山口市スマートシティ推進ビジョン(兼)官民データ活用推進計画(素案)<br/>【概要版】</p> <p>資料3 山口市スマートシティ推進ビジョン(兼)官民データ活用推進計画(素案)</p> <p>資料4 委員名簿</p> <p>資料5 配席図</p> <p>資料6 意見書</p> <p>参考1 子育て世帯を対象としたカスタマージャーニーマップ</p> <p>参考2 DXを主軸にしたスマート“ライフ”シティの創造</p> <p>参考3 スーパーシティ国家戦略特別区域の指定に関する提案書(概要)</p>  |



問い合わせ先

総合政策部 スマートシティ推進室  
TEL 083-934-2728